

< 研究報告 >

「小泉源一によるセンジョウデンダ日本初記録」その年代場所に迫る

竹 重 聡 *

Approaching to the place and estimating of the period with reference to "the first record of *Polystichum atkinsonii* in Japan by Dr. Genichi Koizumi"

Satoru TAKESHIGE

I はじめに

センジョウデンダ *Polystichum atkinsonii* Bedd. (Syn. *P. gracile* C. Chr.) は、南アルプスに自生するオシダ科イノデ属の小型の常緑性シダである (田川1956; 倉田・中池1990)。生育場所は、当初高山帯の岩の割れ目等と考えられていたが、竹重他 (2004) の調査で亜高山帯の針葉樹林下の溪流近くの岩壁の湿った岩場付近であることがわかっている (図1)。

本種は「環境省版レッドデータブック」(環境省2000) で絶滅危惧 I B 類, 「長野県版レッドデータブック」(長野県2002) で絶滅危惧 I A 類に分類される希少植物である。

現在でも採取例が少なく、標本は数点が公的標本庫に存在するのみで、その代表的な標本の採取年代がわかっていない。このためセンジョウデンダは最初について、どこで、どのように発見されたのか、興味があつて、当時に思いをはせ、初採取の年代場所について探ったので、以下のとおり報告する。



図1 岸壁の湿った岩場に生育するセンジョウデンダ

II センジョウデンダの最初の標本

センジョウデンダの標本資料の主なものは、国立科学博物館と京都大学理学部植物標本庫に保管されている。国立科学博物館に納められた標本は、長野県仙丈岳で採取されたものであり、採取者は小泉秀雄である (倉田・中池1990)。そして、その採取年代は不明となっている。小泉秀雄が南アルプスをはじめとして採取した多くの植物標本は、遺族の申し出により国立科学博物館に寄贈され、その中にセンジョウデンダが含まれていた。

また、京都大学理学部植物標本庫に納められた標本についても仙丈岳から採取されており、採取者は小泉源一である (志村1992)。こちらも採取年代が不明である。これらの標本の共通点は仙丈岳山塊で採取されたことと発見年代の不詳である。

小泉源一は仙丈岳で採取したセンジョウデンダを、1個のシダとして確認してはいるだろうが、オシダ科イノデ属のセンジョウデンダとしては確認していないのである。後日、田川 (1956) の記載によって、センジョウデンダと命名され、そして採取年と場所が不詳とされたものである。

二人は兄弟で、小泉源一は兄、小泉秀雄が弟で、二人の出身地は山形県である (清水2004)。

III 『日本南アルプス寒地植物誌』との関係

小泉秀雄が著した『日本南アルプス寒地植物誌』, これはのちに横内斎氏が丹念に資料を掘り起こして改訂増補出版している。ここには年代順に小泉源一が南アルプス植物調査に関する記述が掲載されている。そこにセンジョウデンダ発見につながると考えられる発行記録が書かれている。それには小泉源一に関する記

* 竹重 聡 〒381-2246 長野市丹波島2-16-3

述があり、以下のとおりである。

「小泉源一（理学博士）氏は大正7年、南アルプスの植物探求を目的として助手と人夫を伴い大河原から入山し赤石三山を調査してさらに北進して小河内岳、小日影岳、本谷山、塩見岳を経て三峰川の谷に下り、市野瀬から仙丈岳に登り、その二千米付近の針葉樹林中に氷期植物帯残存していることを発見した。引き続き東駒ケ岳、鳳凰、地蔵の連峰を採集し、八ヶ岳連邦を究めて上諏訪に下山した。此の行に於いて白峰山脈を余すは遺憾なことであった。カイイワヤナギ（東駒ケ岳）アオバヒョウタンボク（仙丈岳）、タカネコンギク（赤石岳）等は当時の発見に係わるものである。新種の記事は「植物学雑誌」（第三十三巻第三八九号）に詳かである。

蓋し空前の壮挙であって採集した植物はおびただしき数に達した。小泉源一の南アルプス植物探求登山は記述としては大正6年8月と大正7年7月～8月だけである。このことから採取年代は大正6年か大正7年と考えてみた。

IV タカネシダと仙丈岳地蔵尾根ルート

田川（1956）がセンジョウデンダを発表したとき、「小泉先生が赤石山脈の千丈ヶ岳で採取されたタカネシダにまじって、日本には新発見のイノデ属の一種があった。タカネシダの標本にまじってゐたことからおしはかれば、高山の岩壁に生えてゐたようである。これはツルデンダに似たところもあるが・・・」と記している。田川が発表したセンジョウデンダは、当時小泉源一が標本として採取したタカネシダと同じ袋に入れたものであると思われる。そこで「タカネシダの標本にまじってゐた・・・」の記述に着目し、『日本のシダ植物図鑑、I』（1990、倉田・中池）のタカネシダの分布の記載を調べてみたところ、南アルプスでは以下の産地があった。

長野県仙丈山塊地蔵岳（高橋秀男1968）。同大鹿村三伏峠（原義彦1968）。山梨県鋸岳（小島俊郎1958、F）山頂。同芦安村北岳八本歯（中村武久1960）。静岡県静岡市井川塩見岳（鈴木亨司、名倉智道1967）。同井川村荒川岳～千枚岳（高橋秀男1968）で、標高が2500m未満の場所は仙丈山塊地蔵岳であった。

筆者はタカネシダが仙丈山塊地蔵岳で発見されたことに興味を覚え、とても感動を覚えずにはいられないのである。それは地蔵岳を経て仙丈岳に登頂あるいは下山するには、伊那里村（現在の長谷村）市野瀬の集

落を通らなければならなかったこと、そしてこのルートは小泉源一が大正7（1918）年に植物探求登山したルートと同じであったこと、その約40年後に田川基二が小泉源一の標本に基づき本種を発表したこと、さらにその約10年後、高橋秀男がタカネシダを採取した場所であったこと、そしてこのルートは通称、登山者の間では地蔵尾根ルートと呼ばれていたこと、つまりこのルート上でタカネシダにまじったセンジョウデンダが採取された可能性が高いことが窺える。

1975年以後、南アルプススーパー林道の完成に伴い、この仙丈岳地蔵尾根ルートの使用者は減少した。併せて昭和39年（1964年）に国立公園に登録され、採取が簡単に出来なくなったことにより、タカネシダとの出会いも減り、標本データ（タカネシダ）の増加も見込めなくなったと思われる。

V 90年前の小泉源一登山行程

『日本南アルプス寒地植物誌』が発表された頃の国内アルプス山岳登山は、まだ始まったばかりであった。南アルプスの登山ルートはまだ確立していない未整備の頃である。だから小泉源一の南アルプス縦走登山植物調査は一般にはなじみが薄く、相当な困難を極めたものであったと思われる。

南アルプス登山が当時の文化として本格的に庶民に親しまれるようになったのは、浅香宮殿下の登山がきっかけで、大正11年8月以降からである。それまでの登山は信仰の一部であった。

植物調査に参加した小泉源一は、京都帝国大学の植物学者であり登山家ではない。戦前のことなので南アルプスに入山した一行は小泉源一、地元の案内人、郷土信州の教育に携わる人たち、そして青年会議所のメンバー、財界の大家達であった。

小泉源一は地元の案内人を頼りにその高山のほとんどもを究めて縦走したのだから、当時としては単独行ではないものの想像を遙かに超えた植物探求であったに違いない。

その想像を絶した調査をさらに詳しく追っていくと、彼らは大正7年7月～8月（1918年7月～8月）に約20日間以上かけて大鹿村の大河原すなわち小渋川の釜沢を上り、小渋川を沢登りして途中岩壁も巻き込んで上り、頂上付近で尾根に出て荒川岳を攻めた、と推測する。現在はそのルートは残っているが、増水したときの危険性から余り利用はされていない。そして赤石岳まで足を伸ばし、また荒川三山に戻って小河内岳、

小日影山, 本谷山, 塩見岳と上り, 少し戻って権右衛門山の右側塩見小屋付近を三峰川の源流方向に, 市野瀬に向かってひたすら下山, 北荒川と合流した後も沢に沿って下り, 市野瀬の集落に辿り着いた(松崎1999)。市野瀬で食糧を補給した翌日は, 東の仙丈岳を目指して柏木の部落を通過して山路を登り, 松峰(現在は20人ほど泊まれる松峰小屋が少し下にある(平口・斉藤1985))を過ぎて地蔵岳(2370.7m)を越えて仙丈岳(3033m)に登ったはずである。市野瀬の宿から5~6時間を歩いた場所付近で, 夏でもあり日が高いことから当日の午後か翌朝に, 本来ならもっと高山にあるはずのタカネシダをはじめとする寒地植物要素が着生している岩石帯に, 出会ったものと想像する。そしてタカネシダの他数十種の寒地植物を標本として採集したのであった。

VI ま と め

南アルプスの深山では当時, 新発見の植物は多かったであろうが, センジョウテンダは, 採取したと考えられる大正7年から38年経って, 1956年に発表された(田川1956)。その後倉田・中池(1990)や志村(1992)により記述され, その間多くの専門家がセンジョウテンダに出会うために南アルプスの仙丈山塊に入山したのである。誰もがあの仙丈岳をイメージするため頂上周辺を調査したと思われ, これがなかなか発見されなかった理由の一つでもある。

『日本南アルプス寒地植物誌』の小泉源一の記述の中に, 仙丈岳の西面の岩壁で学術上見逃せないほどの価値のある寒地植物群を発見したと書かれた記述がある。小泉源一が採取したセンジョウテンダを発見した年代は, 大正6年8月ではなくて, 大正7(1918)年7月~8月の可能性の方が高く, 発見場所として有力視できるのは小泉源一の記述をもとに旧伊那里村現在の長谷村の市野瀬から地蔵尾根を東へ5時間から6時間かけて歩いた登山道の途中, それは地蔵岳手前松峰下方標高2000m付近の針葉樹林帯の湿った岩壁で採集したのではないかと考えられる。

しかしながら, 筆者自身がその付近でセンジョウテンダを発見しても, 小泉源一がセンジョウテンダを採取した場所の証明とはならないが, その可能性が高いとは言える。仙丈岳に登る多くの登山道のなかでももっとも歴史がある地蔵尾根ルートの植物探求を, 出来るだけ早い時期に実現することが今後の課題となる。なお, 小泉秀雄は, 大正10年7月と大正11年7月に,

仙丈岳から東駒ヶ岳, 鋸岳を, また仙丈岳から赤石岳までの植物探求を対象に, 長期日程をかけて踏破している。

よって別々の標本庫に納められたセンジョウテンダの標本は, 小泉秀雄の採取は大正10年と考えられ, ほぼ同年代数年の間に採取されたと考えられる。

小泉源一が植物学雑誌第389号に書き記した『仙丈岳の針葉樹林帯に高地要素の存在することに就いて』の一文が, 『日本南アルプス寒地植物誌』に以下のように再録されている。

「仙丈岳の西面, 上伊那郡伊那里村に向う山腹海拔2000米辺に岩石帯があつて此の岩壁には数十種の寒地植物要素の付着しているものである。きわめて著しき現象であつて黙過する事は出来ない。これは実に学術上深遠なる意味を蔵するものである」とあり, センジョウテンダの自生の可能性を期待させる記述である。



図2 センジョウテンダ。葉身の先, 中軸上の葉の付け根より少し上に無性芽をつける(スケール1 cm)

謝 辞

文献資料につきまして有徳な助言, ご教示を下さった中村武久氏に感謝の意を表します。そしてセンジョウテンダの観察に同行していただきタカネシダの標本について貴重な資料の提供ならびに助言をいただきました岡武利氏に感謝の意を表します。そして当時の小泉秀雄について有徳なご教示を下さった横内文人氏にお礼申し上げます。また本文の作成にあたり貴重な助言, ご教示をいただきました大塚孝一氏に重ねて心より感謝いたします。

参 考 文 献

- 小泉秀雄(1924) 日本南アルプス寒地植物誌
小泉秀雄(横内斎改訂増補)(1959) 日本南アルプス

寒地植物誌

- 田川基二 (1956) Occasional note on Asiatic pteridophytes 6. *Acta Phytotax. Geobot*, 16 : 71-78.
- 平口善郎・斉藤多楨 (1985) 南アルプス山行記. サンブライイト出版
- 倉田 悟・中池敏之 (1990) 日本のシダ植物図鑑Ⅰ : 6. 東京大学出版社
- 志村義雄 (1992) 日本のイノデ属. 静岡新聞社
- 信濃毎日新聞社 (1992) 大鹿に幻のシダ「センジョウデンド」. 9月12日付信濃毎日新聞朝刊
- 松崎岩夫 (1999) 上伊那の地名その由来上伊那地方全図. ほおずき書籍.
- 環境省 (2000) 環境省版レッドデータブック
- 長野県 (2002) 長野県版レッドデータブック維管束植物編
- 信濃毎日新聞社 (2004) 南アルプスに幻のシダ群生地発見「センジョウデンド」, 1月7日付信濃毎日新聞朝刊
- 竹重 聡・大塚孝一・堤 久 (2004) センジョウデンド (オシダ科) の新産地. 長野県植物研究会誌, 37 : 39-44.
- 清水敏一 (2004) 大雪山の父・小泉秀雄. 北海道出版企画センター